

# 北九州市立大学

## 文学部紀要

第86号

「セント・モア」の結末に見られる希望の光  
—機械文明からの自由解放、そして大自然への回帰へ—

田部井 世志子 …………… 1

北九州市立大学文学部  
比較文化学科  
2016



# 「セント・モア」の結末に見られる希望の光 —機械文明からの自由解放、そして大自然への回帰へ—

田部井 世志子

## 概要

D・H・ロレンスの中篇小説「セント・モア」の結末——主人公のルウが人間関係を避け、アメリカのロッキー山脈の懐へ入り大自然の中で隠遁者的な生活を求める——については、そこに不毛性を見出し、彼女の先行きに不安を感じ取る批評が従来多かった。そこで本稿では、虚心坦懐にルウの求めたものを追求し、イメージや象徴にも着目することで、また、ロレンスの他の作品をも援用することで、ルウの再生・復活の可能性を探った。機械文明の発達等のゆえに現代人は人間関係が築けなくなりつつあるというロレンスの問題提起に耳を傾け、ルウの取った途に共感できるのかどうかを試されている。

## キーワード

D・H・ロレンス、「セント・モア」、隠遁、機械文明、地霊、  
大自然への回帰、不死鳥(フィニックス)、再生、蛇、龍

## はじめに

1925年5月に出版されたD・H・ロレンスの中篇小説「セント・モア」(“St. Mawr”)は、近年、『オックスフォード現代イギリス文学選集』の中にも組み込まれ、「とても人気のあるテキスト」になり「目立つ存在」になってきた(Brown 23)。これまでの批評としては、F・R・リーヴィス(Leavis cf. 271-72)やA・O・エーラート(Ehlert cf. 124)の批評のように作品を好意的に、また高く評価するものがある一方、E・ヴィヴァス(Vivas)やK・セイガー(Sagar)をはじめとした「敵意に満ちた」(Bleakley 114)厳しい批評を下す批評家が多いのも事実である。<sup>i</sup> その原因の一つとして「セント・モア」から受ける違和感——人物描写や筋の展開など——が挙げられるだろう。その「違和感」の中でも多くの批評家が指摘するのは、タイトルにもなっている中心的な存在、馬のセント・モアが物語の後半において「ほとんど奴隷のように雌馬の後に嗅ぎまわる」(“St. Mawr” 132) 存在として描写され、忽然として物語から消えてしまうという筋の設定である。しかも、物語の後半ではかつての美しいモアの姿は単に「幻影」(“illusion”)(137)だったと語られる始末である。このような問題を抱えているとするならば、K・ブラウン(Brown)が「セント・モア」の意義

を認めつつも、ロレンスへの導入作品として扱うのは好ましくないというのも納得がいく (cf. 23)。更に、ロレンスは「セント・モア」において、ポスト構造主義の今日にあっても「最高級の芸術」には必須と考えられる概念——「全体が統合された有機的なもの」——を満たしていない点をブラウンは指摘するのである。

そこで筆者は、作品には一貫性がなく、「有機的」で「統合された」ところはないという論に疑義を唱え、それを覆すために拙論「馬ではなく、蛇が……——『セント・モア』におけるキー・イメージ」を上梓した。第1章では、物語前半におけるモアの役割を確認し、途中降板の意味を探り、第2章では、物語が実際に有機的に統一されていて一貫性がないのか、という問題にメスを入れてみた。到達した結論は、ルウの自己覚醒・自己実現の物語としてプロットのに一貫性があるだけでなく、作品はイメージ的にも物語の前・後半を通じて統一されているということであった。馬ではなく蛇(大蛇、あるいは龍)を中心とした、生命力を喚起させる表象群によって物語のイメージは統一されているのだ。すなわち、物語の前半における、蛇の死骸との遭遇から物語は大きく展開し、そこで蛇のメッセージ——生命力の危機的状況に対する警告——はモアからルウへと確実に伝わり、彼女は、少なくともイングランドから脱出し機械文明社会や人間を避け、モアと同様、奴隷状態から抜け出すことで自由・解放を求め、最終的に大蛇(龍)のイメージで描かれる大自然の懐へと飛び込み、それとの対峙を求めることで自己確認の道へと進んでいったと考えられるのである。

以上が拙論の概要であるが、物語の結末で、いわば隠遁者ようになっていくルウの状況が、果たして彼女の救いの可能性に繋がるのかどうかという重要な問題についての議論は、紙面の都合上、展開できなかった。

\*\*\*\*\*

人間関係を原則的に絶ち、山の奥へと入っていくルウを巡っては、その先行きに不安を感じ、否定的な結末を読み取る批評家は多い。<sup>ii</sup> 例えば、J・H・ハリス (Harris) は、結末のウィット夫人の皮肉からも分かるように、ロレンスは隠遁者の道を歩もうとする登場人物に「不毛性」を見ているという。

By the last pages, she [Mrs Witt] respects Lou's marriage to a landscape, a spirit of place. In this tale, the issue is at least temporarily closed, as Lou is allowed to end up worshipful, but also where nearly all of Lawrence's male leaders have longed to be, alone, untouched. However, as one sees [...] in Lawrence's last satires, once he imagines a character succeeding in this hermit's quest, he sees the sterility it invites. (195)

セイガーは「セント・モア」を、「まずは馬の助けを得、そして大自然の風景によって何とか自分の人生を変えることはできた」ものの、「自分の人生を変えてくれるような男に出会うことのない女について」の物語であるとし、「救い主としての男性が現れないヒロインは他にはいない。他のヒロインはみんな与えられている」ということを強調している(“Introduction” 27)。また、セイガーは全体的には前向きな捉え方をしつつも、ルウよりも先に山に入った「ニューイングランドの女」の経験に照らし合わせてみると、結局はルーの主張——「地霊は彼女を愛し、彼女を求めている」——は正当化されていないと見る。

Life on the ranch indeed saves Lou from cheapness, keeps bright before her the meaning and the mystery she had first seen in the eyes of St Mawr. But her claim that the spirit of the place loves her and wants her cannot be sustained against the experiences of the New England woman so vividly recounted in the preceding pages. (*Art* 159)

また、「*St Mawr* はいわゆる『荒地』的状态にある英国という文明社会の人間の生活を描くと共に、そういう生活からの救済の可能性をヒロイン Lou Witt と原始的異教世界の関係を通して探究した作品である」(158-59)という内田憲男氏も、結末解釈についてはやや否定的である。

ここで英国によって代表される現代の文明社会が糾弾され、また同時に Lou が取るべき道が示されていることは言うまでもないだろう。彼女は「新たな出発をするために」、ニューイングランド女性の後を追って、原始的自然の中で鼠や黒蟻といった「下等な」生きものと戦わねばならないのである。それが彼女の見た「悪のヴィジョン」の中で唯一つ救済の道として指し示された生の在り方の現実である。(170)

更に内田氏は次のように続ける。

原始的な自然の中で隠遁生活を送ることによって Lou が英国という文明社会の「安価さ」から救われることは可能であるかもしれない。しかし彼女が「悪意」さえ存在する非人間的な世界との戦いによって新しい出発のための「勝利と力」を獲得することは、ニューイングランド女性の生活に照らして考えれば、不可能である。Lawrence が先の観点を挿入することによってこの Lou の決意に肯定的な響きを与えようとしていることは明白である。しかし読者は、彼女の生の魅力への希求は認めながらも、彼女に対して母親 Witt 夫人が吐く皮肉な言葉を全く無意味なものとして打ち消してしまうことは出来ないのである。

[……]

*St Mawr* はこのように作者の意図を作品が裏切っている非常に興味深い作品である。(170-71)

氏もこのようにウィット夫人の皮肉にこだわり、ルウの未来に関しては手放しでは喜ばず、不安を感じているのである。

以上、見てきた通り、批評家たちはルウの将来について、ロレンスの渴望は投影されていると認めつつも、悲観的に捉えるものが多い。しかし、果たして彼女の将来はそれほど救いがないのだろうか。人間関係を絶ち、一種の隠遁生活を求めることは絶望にしかつながらないのだろうか。ルウは「ニューイングランドの女」と同じ道を辿る運命なのだろうか。ウィット夫人の皮肉はルウの将来の不安を掻き立てるだけなのだろうか。本稿ではこういった問題を解決しつつ、ルウの結末解釈に新たな視点を投じてみたい。

## 1. ルウの探求するものの変化

作品が蛇(大蛇、あるいは龍)を中心とした生命力を喚起させる表象群によって全体のイメージが統一されていることは、拙論「馬ではなく、蛇が……——『セント・モア』におけるキー・イメージ」ですでに論じた。同時に本作品は、ルウの自己覚醒の物語としてもプロットのに一貫性があるのである。「生命の王」でもあり、大地の内部に存する「暗黒の太陽」のメッセージを伝える「大地のメッセンジャー」ともいうべき存在(*cf.* “The Hopi Snake Dance” 78, *see also* 82)でもある蛇が、人の手により殺されていた場面を契機に、物語は大きく展開していく。蛇の死骸を見ることにより、生命の危機的状況というメッセージがモアに伝わり、人間にとって近い存在であるモアからルウは、それを引き継ぐ。生命の重要なメッセージを受け取ったルウの求めるものは、その後、確実に変化していくのだった。まずルウの求めるものの変化を追っていこう。

### 1. 人間(男女)関係の追求とその破綻

ルウは22歳の時にリコと出会う。浮気心が芽生えたり、問題を抱えるリコであったが、ウィット夫人の反対を押し切って25歳の時に結婚をする。兄妹のような関係を維持しつつも(24)、やがて二人の関係は「意志の闘い」(41)になっていき、最終的にルウは彼を受け入れられなくなっていく。何が問題だったのだろうか。まず、リコがどのような人物であったのかを確認しておこう。彼が機械人間であることはすでに拙論で論じた(*cf.* 「馬ではなく、蛇が……」 277-78)。彼の「ハンサムで、若く英雄的な外観の裏」には「自分自身の内に何か欠けているということに対する恐怖」が存在しており(34)、彼に欠けているのは、「大地の奥深くから直接生命の炎を供給される [……]

純粹な動物人間」が持っている、「固定化された機械的な存在」すなわち機械人間になってしまった「退屈で不愉快な人々」(“dreary people”)には求めるべくもないもの、つまり「<sup>ワンダー</sup>驚異の念」なのであった(cf. 62)。「驚異の念」が今日無くなっていることは、ロレンスが「人生における讚美歌」(“Hymns in a Man’s Life” 598)の中でも述べていることだった。リコには「生命」が、「力」が(cf. 31)、そしてそれと密接にかかわる「驚異の念」が欠けているのだ。<sup>iii</sup>

次に、リコを表わす言葉の一つ、「アティチュード」(“attitude”)(32)に目を向けよう。リーヴィスが指摘するように、「アティチュード」とは『人格』、『思想』の原動力、そして意志や神経に属する<sup>アティチュード</sup>(278)のものであり、リコがパワーに欠け、常にポーズを保とうとする人間に過ぎない(see also 101)のに対し、モアの目に溢れている黒い炎は「ポーズ」などではなく「本物」である(32)というように、両者の対比が著しい。モアがリコを振り落として怪我をさせてしまった場面をきっかけに、ルウが思いを巡らす場面があるが、ルウにいわせればリコの方が「より邪悪」なのだ。このように、機械文明の中にどっぷりと浸かり、「ポーズ」だけになり、生命力を失ってしまったリコの機械人間的要素に対して、ロレンスが批判的な目を向けていることが分かる。

何故、機械や機械文明が問題なのだろうか。もう少し詳しく見ていこう。本来、人間はどうあるべきなのかという問題について、ロレンスは「ニューメキシコ」(“New Mexico”)の中で以下のように述べている。

[...] the whole life-effort of man was to get his life into direct contact with the elemental life of the cosmos, mountain-life, cloud-life, thunder-life, air-life, earth-life, sun-life. To come into immediate *felt* contact, and so derive energy, power, and a dark sort of joy. This effort into sheer naked contact, *without an intermediary or mediator*, is the root meaning of religion [...]. (146-47)

人間が努力すべきは、媒介を通すことなく、宇宙的な地水火風の四元素の生命と直接の触れ合いを持つことなのである。ところがロレンスによると、機械こそが人間と大自然との間に皮膜を作ってしまう、直接的な触れ合いを妨げているという。<sup>iv</sup>「ニューメキシコ」の中でロレンスは、地球をボンボンに、その上を行き来する機械文明の象徴ともいべき交通手段をセロファンに、そしてその交通手段を用いて地球上を旅する人間を蠅に喩え、機械のおかげで地球をすべて知り尽くしたと思っ込んでいる人間の実態を痛烈に以下のように批判する。

We are mistaken. The know-it-all state of mind is just the result of being outside the mucous-paper wrapping of civilization. Underneath is everything we don’t know and are afraid of knowing.

I realized this with shattering force when I went to New Mexico.

New Mexico [...] the picturesque reservation and playground of the eastern states, very romantic, old Spanish, Red Indian, desert mesas, pueblos, cowboys, penitents, all that film-stuff. Very nice, the great South-West, put on a sombrero and knot a red kerchief round your neck, to go out in the great free spaces!

That is New Mexico wrapped in the absolutely hygienic and shiny mucous-paper of our trite civilization. That is the New Mexico known to most of the Americans who know it at all. But break through the shiny sterilized wrapping, and actually *touch* the country, and you will never be the same again. (141-42)

文明というセロファンの包みの下には、それによって隠されてしまっているニューメキシコのすべてが存在するという。我々が知るのを怖がっているすべてが。直にそれに触れる経験をしたロレンスは、改めて自己と周囲の触れ合いが希薄であることに思い至り、以来、彼は大自然との触れ合いにこだわるようになる。

機械により妨げられているのは大自然との直接的接触だけではない。人間同士の触れ合いも希薄になりつつあるとロレンスは訴える。「触れ合いとっていいほど親密な」炭坑夫どうしの交わり、「非常に真正かつ力強い」、「肉体的知覚や親密な一体感」こそが重要なのだ(“Nottingham and Mining Countryside”135-36)。今日の情報機器類の発達が若者たちの直接的なコミュニケーションを奪っていることについては、社会学者の土井隆義氏、<sup>v</sup> 比較行動学者の正高信男氏<sup>vi</sup> など、多くの人々が指摘をしていることであった。

そもそも現代人は生命あふれる対象との交感や触れ合いを求めつつも、ウィット夫人に表現されているように、結局は触れ合うことができない。彼女が求めているのは何だろうか。

Sex was a mere adjunct. She [Mrs Witt] cared about the mysterious, intense, dynamic sympathy that could flow between her and some “live” man—a man who was highly conscious, a real live wire. That she cared about. (101)

このように「神秘的で強烈、そしてダイナミックな共感」を求めているにもかかわらず、「別世界に住む」(106)ルイスとの間にはギャップがあり、そのために彼に触れることができないウィット夫人(103)であった。この問題はウィット夫人に限ったことではない。ルウもまた機械人間リコとの関係において、そのような触れ合い、交感が得られることはなかったのである。

モアを通じて生命の重要なメッセージを受け取ったルウであるが、彼女がもともと抱いていた、

求めるべき男性像とはいかなる存在だったのだろうか。それは、「生き生きとした尊厳ある動物ともいうべき一人の男」(“one single man who is a proud living animal”) (61) であった。しかしそれは、ウィット夫人がいうように「考えることができる」という意味でのすばらしさを具えた人間ではない。そのことは、次の両者の会話から明らかである。

“Louise [Lou],” she [Mrs Witt] said, “you won’t tell me that the mere animal is all that counts in a man. I will never believe it. Man is wonderful because he is able to *think*.”

“But is he?” cried Lou, with sudden exasperation. “Their thinking seems to me all so childish [...]. How can you be impressed?”

Mrs Witt raised her eyebrows sardonically.

“Perhaps I’m not –any more,” she said with a grim smile. (60)

しかし、そのような男性も見つからないままルウは「とてつもなく大きな機械のような人間の生活」を送る中で、「何かがこの状態から運び去ってくれない限り」、そのまま「ガタガタ音をたてながら」、「荒廃」の道を進むしかないとさえ感じるようになる(94)。実際彼女は、リコをはじめとする彼の取り巻き連中たち、いわゆる「考えることができる」といわれそうな人々の存在が耐えられないと母親に手紙の中でこぼす。

“[...] A sort of hatred for people has come over me. I hate their ways and their bunk, and I feel like kicking them in the face, as St. Mawr did that young man. [...]

“So I have told him [Rico]. I said this evening, when no-one was about: *Rico dear, listen to me seriously. I can’t stand these people. If you ask me to endure another week of them, I shall either become ill, or insult them, as mother does.[...] I tell you, I shall just make a break, like St.Mawr, if I don’t get out. I simply can’t stand people.[...]*” (117-18)

機械文明によって機械人間になってしまっているリコをはじめとする周囲の男たちでは不十分なのである。では、ルウが求めていた「生き生きとした尊厳ある動物ともいうべき一人の男」とはいかなる存在だったのだろうか。彼女が必ずしもモアが象徴するような「穴居人」(“the cave man”)、あるいは文明化されていない原始的な存在を良しとしているわけではないことは、次のルウの言葉からも明らかである。

“[...] I don’t consider the cave man is a real human animal at all. He’s a brute, a degenerate.” (61-62)

実際、後で見ていく通り、ルウはロッキー山脈の奥に入っていくわけだが、その際、お供としてついてきてくれたフィニックスに関しては、彼との間に「ある種の肉体的な共感」(137, see also 153)があったものの、ルウにとって彼は所詮「召使」であり、自分には不適切な存在だと考えているのだ。

When Phoenix presumed she was looking for some secretly sexual male such as himself, he was ridiculously mistaken. Even the illusion of the beautiful St. Mawr was gone. And Phoenix, roaming round like a sexual rat in promiscuous back yards! – *Merci, mon cher!* For that was all he was: a sexual rat in the great barn-yard of man’s habitat, looking for female rats! [...]

Strictly, and perhaps in the best sense, he was a servant. [...]

[...] She no longer wanted to fool herself. She had no desire at all to fool herself into thinking that a Phoenix might be a husband and a mate. No desire that way at all. His obtuseness was a servant’s obtuseness. She was grateful to him for serving, and she paid him a wage. Moreover, she provided him with something to do, to occupy his life. In a sense, she gave him his life, and rescued him from his own boredom. It was a balance. (137, see also 153)

彼女に仕えてくれるどれほどすばらしい人物であろうとも、「単なる性行為」そのものは彼女にとって「嫌悪を催させる」ものであるという。

And she knew, with the last clear knowledge of weary disillusion, that she did not want to be mixed up in Phoenix’s sexual promiscuities. The very thought was an insult to her. The crude, clumsy servant-male: no no, not that. He was a good fellow, a very good fellow, as far as he went. But he fell far short of physical intimacy.

“No no,” she said to herself, “I was wrong to ride in the front seat with him. I must sit alone, just alone. Because sex, mere sex, is repellant to me. I will never prostitute myself again. Unless something touches my very spirit, the very quick of me, I will stay alone, just alone. Alone, and give myself only to the unseen presences, serve only the other, unseen presences.” (138)

「単なる性行為」による関係ではなく、「まさに精神、まさに自分の核心的な部分」に触れてくれる存在が必要だという。フィニックスは人間と他の動物の両要素を具えているという意味では、まさにパン的存在だということもできよう。しかし、ルウはフィニックスを自己のパートナーとして求めることはない。リーヴィスも述べるように、「彼女は理想的な男(man 人間)が考えることのでき

ない人間であるなどと提案しているわけではなく」、また、彼女は「知性に対抗して『血』や『本能』へと逆行することについては、どんなことがあろうとも拒絶する」(282)のだった。このようにルウは、「思考することのない」穴居人との関係を求めることはできないのである。<sup>vii</sup>それは一旦林檎の木の実を食べてしまった人間の「運命」なのだ。

Let us accept our own destiny. Man *can't* live by instinct, because he's got a mind. [...]

It is impossible. Because, since man ate the apple and became endowed with mind, or mental consciousness, the human emotions are like a wedded wife; lacking a husband she is only a partial thing. The emotions cannot be “free.” (“On Human Destiny” 624; see also *Studies in Classic American Literature* 144)

K・ウィドマー(Widmer)も論じるように、ルウが求めるのは、機械文明に毒された現代社会に埋没することでもなく、原始的な動物のような存在に戻ることもなく、「現代的な感性」においては失われてしまった「より充実した直接体験」なのである。

Lawrence presents not a return to animal existence (we must “still be ourselves”) but the need for fuller immediate experience, which has been lost in modern sensibility. (71)

ルウのフィニックス(あるいはルイス)の捉え方、あるいはロレンスのこれまで見てきたような捉え方は、人種差別主義につながらなくはない。<sup>viii</sup>しかし、興味深いのは、本作品においては、フィニックスの視点で彼の立場もあえてロレンスが書き込んでいる点である。

But his own real female counterpart?—Phoenix would just have shrugged his shoulders, and thought the question not worth answering. How could there be any answer in her, to the phallic male in him? Couldn't! Yet it would flatter his vanity and his self-esteem immensely, to possess her. [...] Only, the aboriginal phallic male in him simply couldn't recognize her as a woman at all. In this respect, she didn't exist. (135)

フィニックスの側もルウのことを全く女と認めてはいないという。いずれにしても両者はそれぞれが求めるべき相手ではないということが明確に記されているのであり、一方的な差別主義の設定にはなっていないという点、また、ロレンスがどちらかを優れているとか、劣っていると比較をすることは無意味であると論じていることも忘れてはならない(*cf. Studies in Classic American Literature*

50)。もっとも物語の全体的な展開はあくまでルウの視点に沿って流れているのは事実であり、彼女が、そしてロレンスが、原始的な世界に憧れつつも、住む世界が異なるという認識から最終的に自由になることはなかった。我々はそこにルウの、そしてロレンスの二律背反的な葛藤の存在を認める必要があるだろう。<sup>ix</sup>

以上見てきた通り、ルウは男女関係に救いを求めつつも結局は破綻してしまうのだった。モアのように破壊行為をとる代わりに、機械・科学(文明)の象徴、あるいはその旗手ともいべきリコを否定し、イギリスにおける彼を取り巻く社会を批判し、彼の象徴する「無価値なもの」をイギリスに残したまま、人を避け、自由を求め、「価値あるもの」を探すためにアメリカへと、非人間的な大自然の懐へと新たな生を求めて旅立つのだった。

## 2. 大自然との出会いと使命の感得

最終的には人間関係を求めるとしても、人間が現代社会において機械的になり、生命力を失いつつある中で優しさを示せなくなってしまったからには、まずは男と女はしばし離れ、自らを取り戻す必要があるということ、ルウがルイスとの会話の中で述べていたことを想起しよう。

“[...] It seems to me men and women have really hurt one another so much, nowadays, that they had better stay apart till they have learned to be gentle with one another again. Not all this forced passion and destructive philandering. Men and women should stay apart, till their hearts grow gentle towards one another again. Now, it's only each one fighting for his own—or her own—underneath the cover of tenderness.”(122)

男も女も優しくなれるまで離れていた方が良いのである。そのような認識を持ったルウの向かった先はアメリカ大陸であった。以下、彼女の旅の足跡を追ってみよう。最初に訪れたテキサスはルウの期待に沿う場所ではなかった。彼女は次のようにいう。

What, in heaven's name, was one to make of it all?

Soon, she could not stand this sort of living in a film-setting, with the mechanical energy of “making good,” that is, making money, to keep the show going. (132)

「映画製作における、こういった類いの生活」に耐えられないルウは、更に北へと向かうことになる。もちろん彼女は、テキサスそのものに対してというよりは、「映画製作」に関わる「金儲け」に「機械的なエネルギー」を費やす、そこでの人間の営みに対して失望し、それが耐えられなく

なったのである。

また、アメリカ大陸に渡り、大自然が眼前に広がる中、「奴隷のように雌馬を追いかける」モアを目の当たりにしたルウは、モアにも背を向け、孤独を求めてモアとルイスをそこに残し、なお一層北へ、サンタフェへと移動する。

They left St. Mawr and Lewis. But Phoenix wanted to come along. So they motored to San Antonio, got into the Pullman, and travelled as far as El Paso. Then they changed to go north. Santa Fe would be at least “easy.” And Mrs Witt had acquaintances there. (132)

サンタフェでしばらく滞在した後、人間とのかかわりの中で、やはりルウは「不安に」なり、「ヨーロッパよりもひどい」(133) と感じるようになる。彼女にはイタリアかどこかへ行く選択肢もあったが、結局、彼女の意識は人間的なものを一切寄せ付けない非人間的な大自然に傾き、最終的にはメキシコ人が売りたいといっている牧場を見るために更に山の奥深くへと入って行くことになる。

#### i. 巫女的存在としての自己認識

アメリカを移動する中で、ルウはやがて自分が結婚するタイプの女ではないと悟っていく。もっとも、「神秘的な新人」(“the mystic new man”) が現れるまでの話であることはいうまでもないが、彼女が自らに語りかけている独り言を、以下に引用してみよう。

“I am not a marrying woman,” she said to herself. “I am not a lover nor a mistress nor a wife. It is no good. Love can’t really come into me from the outside, and I can never, never mate with any man, since the mystic new man will never come to me. No no, let me know myself and my role. I am one of the eternal Virgins, serving the eternal fire. My dealings with men have only broken my stillness and messed up my doorways. It has been my own fault. I ought to stay virgin and still, very, very still, and serve the most perfect service. I want my temple and my loneliness and my Apollo mystery of the inner fire. And with men, only the delicate, subtler, more remote relations. No coming near. A coming near only breaks the delicate veils, and broken veils, like broken flowers, only lead to rottenness.” (139)

このような「悟り」に到達した彼女はようやく「平安」を感じることになる。

She felt a great peace inside herself as she made this realization. And a thankfulness. Because,

after all, it seemed to her that the hidden fire was alive and burning in this sky, over the desert, in the mountains. She felt a certain latent holiness in the very atmosphere, a young, spring-fire of latent holiness, such as she had never felt in Europe, or in the East. (139)

こうしてルウは現れるかどうかとも分からない「神秘的な新人」の到来を待ちわびつつ、その時までには「永遠の炎」に仕えるために、「永遠なる処女」の一人であることを選択する。このような一種の悟りを得たルウは、更にアメリカ大陸の奥深くへと旅を進めることになる。

## ii. ロレンスのアメリカ体験、大空間を求めるロレンス

ルウのアメリカ大陸探索はまだ途半ばであるが、そもそもルウの選んだ土地が何故アメリカだったのかについて、ここで考察を加えておこう。本作品を書くにあたって、ロレンスが実際に体験したアメリカ——ニューメキシコ、タオス——の影響が大きかったということはいうまでもない。ロレンスが人間関係における触れ合い、つながり回復を訴えるにあたり、その主張の根幹ともいべき前提条件——大自然とのつながり回復——へとロレンスの意識を誘ったのが、大きな転機を与えてくれたのが、まさにアメリカだったのである。ロレンスは1924年6月28日付けの義母宛の手紙の中で「本当のアメリカ」と「白人たちのアメリカ」を、それぞれ次のように表現している。

[...] life in America is empty and stupid, emptier and stupider than with us. I mean city-life and village-life. Here, where one is alone with trees and mountains and chipmunks and desert, one gets something out of the air: something wild and untamed, cruel and proud, beautiful and sometimes evil, that really is America. But not the America of the whites. (*The Letters V* 63)

ロレンスはアメリカの白人たちの生活を「空虚で愚かな」と形容する。そして、彼に重要な影響を与えたのは、「野生的で飼いなされることのない何か、残酷で誇り高く美しく、時には邪悪でさえある何か」を与えてくれる大自然であり、それこそが彼にとって真のアメリカだったのである。彼の体験と同様、ルウは「残酷なまでに」何もないアメリカの空間の沈黙を求めるのだった。すべてを包容するアメリカの大自然、その絶対的な沈黙は素晴らしいものであり、イギリスの沈黙とは全く別物だったのである。

And suddenly, she craved again for the more absolute silence of America. English stillness was so soft, like an inaudible murmur of voices, of presences. But the silence in the empty spaces of America

was still unutterable, almost cruel. (82)

また、とりわけ空間、景観の壮大さに対するロレンスのこだわりが強かったことは、W・K・バツクリー(Buckley)も指摘する通りである。

Of course, the appeal of “wide open spaces” is nothing new for Americans. But for Lawrence, “space” takes on a special character. (39)

それは「魂の新たな部分がむっくりと起き上がり、古い世界が退き、代わって新しい世界が到来する」(“New Mexico” 142)くらいの体験だったという。また、「文明化された現代という時代、物質と機械の大いなる時代から、わたしを解放してくれ」、「わたしが永続的な宗教感情を感得しえた」(144)唯一の土地がニューメキシコであったとも述べている。その地を訪れたことでロレンスは「あらゆるものが生きていた最古の宗教」、あるいは「万人に共通の宇宙宗教」というものに思いを馳せる。

In the oldest religion, everything was alive, not supernaturally but naturally alive. There were only deeper and deeper streams of life, vibration of life more and more vast. So rocks were alive, but a mountain had a deeper, vaster life than a rock, and it was much harder for a man to bring his spirit, or his energy, into contact with the life of the mountain, and so draw strength from the mountain, as from a great standing well of life, than it was to come into contact with the rock. And he had to put forth a great religious effort. [...]

It was a vast and pure religion, without idols or images, even mental ones. It is the oldest religion, a cosmic religion the same for all peoples, not broken up into specific gods or saviours or systems. It is the religion which precedes the god-concept, and is therefore greater and deeper than any god-religion.

And it lingers still, for a little while, in New Mexico: but long enough to have been a revelation to me. (146-47)

ニューメキシコで経験したのは、偶像もなければ、聖像もなく、また特定の神や救世主、あるいは宗教体系に分裂する前の最古の宗教体験であった。そこは「大宇宙の根源の力」に対して、「仲介物や仲介者なしに、真に赤裸々な接触を得ようとする努力」ができる地なのだった。「生の努力のすべて」を「大宇宙の根源の力、山の生力、雲の生力、大気の生力、大地の生力、太陽の生力と、

自分の生命とを直接に触れ合わせることに注ぐことのできる体験であった。以上見てきた通り、アメリカはロレンスにとって、沈黙を保ち、神秘的で根源的な宗教体験が可能な、大いなる大自然の空間であった。そこで彼は人間の卑小さを受け入れていく。ロレンスにとってのアメリカ体験はここまで彼に重要な影響を与えたのである。

健康上の都合で、寒い冬場はその地を離れることを余儀なくされたものの、以来、ロレンスはその地に惹かれ、折に触れて訪れることになる。ロレンスのニューメキシコに対する思いの強さについてはエーラートも次のように述べていた。

Always greatly interested in foreign cultures, as manifested in his travel books, such as Etruscan Places, Lawrence responded strongly to the New Mexican landscape and culture. (111)

このようなアメリカの大自然の中で果たしてルウは再生を遂げることができるのだろうか。

### iii. 「ニューイングランドの女」の場合

ルウの再生への希望の有無を見ていくにあたり、ルウの比較の対象として、彼女の前に同じロッキー山脈の山奥にあるラス・シーヴァス牧場に実業家の夫とともにやってきて、そこを開拓し、「環境を征服し」(141)、そこででの生活を実現させようとした「ニューイングランドの女」とその牧場との関係を見ていくのも意味が無くはないだろう。

もともとロレンスは女性に対して大きな期待をかけていた。ロレンスによると、生命が何たるかについては、女性の方が男性よりも良く分かっていたという。

Now women used to understand this better than men. Men, who were keen on weapons, which all have points, used to insist on putting point to life and love. But women used to know better. They used to know that life is a flow, a soft curving flow, a flowing together and a flowing apart and a flowing together again, in a long subtle motion that has no full-stops and no points, even if there are rough places. (“Do Women Change?” 541)

ところが、現代においては女性も変化をし、男性と同様になり、生命が何たるかを解さなくなりつつあると、同エッセイの中でロレンスは嘆いている。因みに、「ニューイングランドの女」を見る限りでは、彼女は確実にロレンスの憂える「現代女性」であるといえるだろう。まず彼女についての説明を、以下の引用に見てみよう。

And if it had been a question simply of living through the eyes, into the *distance*, then this would have been Paradise, and the little New England woman on her ranch would have found what she was always looking for, the earthly paradise of the spirit.

But even a woman cannot live only into the distance, the beyond. Willy-nilly she finds herself juxtaposed to the near things, the thing in itself. And willy-nilly she is caught up into the fight with the immediate object.

The New England woman had fought to make the nearness as perfect as the distance: for the distance was absolute beauty. She had been confident of success. She had felt quite assured, when the water came running out of her bright brass taps, the wild water of the hills caught, tricked into the narrow iron pipes, and led tamely to her kitchen, to jump out over her sink, into her wash-basin, at her service. *There!* she said. I have tamed the waters of the mountain to my service.

So she had, for the moment.

At the same time, the invisible attack was being made upon her. While she revelled in the beauty of the luminous world that wheeled around and below her, the grey, rat-like spirit of the inner mountains was attacking her from behind. (146-47)

「ニューイングランドの女」がその牧場を取り巻く遠景の美しさだけに満足していれば、そこは「天国」であったかもしれない。ところが彼女は人生に「ポイント」(“Do Women Change?” 541)を持たせることに躍起となった。結局彼女は、牧場の「身近なもの」との「闘い」において「成功」を収めたと確信し、それによって大自然を自分の思うように手なづけることができたと錯覚してしまったのだ。しかし、そのような状況は長く続くことはない。大自然からの「眼には見えない逆襲」が始まり(147)、徐々に彼女は大自然に対して「恐怖心」を抱くようになる。

But she was afraid. Especially she was conscious of the prowling, intense aerial electricity all the summer, after June. The air was thick with wandering currents of fierce electric fluid, waiting to discharge themselves. And almost every day there was the rage and battle of thunder. But the air was never cleared. There was no relief.[...]

And her love for her ranch turned sometimes into a certain repulsion. [...] Then the cruel electricity of the mountains. And then, most mysterious but worst of all, the animosity of the spirit of place: the crude, half-created spirit of place, like some serpent-bird forever attacking man, in a hatred of man's onward-struggle towards further creation. (150)

安堵感も次第に感じられなくなり、その牧場に対する愛情も「一種の嫌悪感」に変わっていく始末である。その牧場の「蛇鳥」(“serpent-bird”)のような「地霊」<sup>x</sup>が「更なる創造」への人間の格闘に対し、憎しみを示し始めたのである。そしてとうとう「ニューイングランドの女」は牧場を去り、山を降りることを決意する。次の引用に見られるように、彼女の「地上の楽園」に対する信念はもろくも崩れ去ってしまうのだった。

At last, after many years, the little woman admitted to herself that she was glad to go down from the ranch, when November came with snows. She was glad to come to a more human home, her house in the village. And as winter passed by, and spring came again, she knew she did not want to go up to the ranch again. It had broken something in her. It had hurt her terribly. It had maimed her forever in her hope, her belief in paradise on earth. Now, she hid from herself her own corpse, the corpse of her New England belief in a world ultimately all for love. The belief, and herself with it, was a corpse. The gods of those inner mountains were grim and invidious and relentless, huger than man, and lower than man. Yet man could never master them. (150)

そして「ニューイングランドの女」が牧場へと戻ることは二度となかった。

The little woman in her flower-garden away below, by the stream-irrigated village, hid away from the thought of it all. She would not go to the ranch any more. (150)

一旦は水を飲めるようにすることで大自然を「飼<sup>て</sup>い慣<sup>い</sup>ら<sup>し</sup>」し、「文明が征服した」(141)と感じられることもあった。「意志」によって「理想」ともいうべき牧場を開拓することに金を使い、数年の歳月をかけて牧場を生活の場に仕上げようとした(142)彼女の努力は成功し、報われたかのように思えた。しかし、すでに見てきた通り、「常に人間の意志に対して闘いを挑む、何らかの神秘的な悪意」(143)がロッキー山脈には存在し、鼠の一団が象徴する、その地霊の悪意(143)ゆえに、結局は眼には見えない大自然の攻撃により、人間の意志は無効にされてしまうのであった。そもそも、その大自然を飼い慣らそうとし、それをあたかも成功させたかのように思い上がったところに挫折の原因があったといえるだろう。

#### iv. ルウの場合——使命の感得

では、ルウの場合はどうだったのだろうか。アメリカと一口にいても、彼女が求めたのは、自動機械的なエネルギーを感じさせる映画作りの舞台、テキサスではなく、またサンタフェでもな

く、最終的には人間的なものを一切寄せ付けない非人間的な山奥の大自然であり、そして辿り着いたのが、「ニューイングランドの女」と同様、タオスの近く、ロッキー山脈の麓にあるラス・シーヴァスであった。それはまさに静けさと魂の平安を取り戻すための旅といっても良いのかもしれない。

She knew what she wanted. She wanted relief from the nervous tension and irritation of her life, she wanted to escape from the friction which is the whole stimulus in modern social life. She wanted to be still: only that, to be very, very still, and recover her own soul. (137)

そして、ロッキー山脈の懐へと入っていった彼女は、「この場こそが求めていた場所」だと感じ取る。

Yet it was the place Lou wanted. In an instant, her heart sprang to it. The instant the car stopped, and she saw the two cabins inside the rickety fence, the rather broken corral beyond, and behind all, tall, blue balsam pines, the round hills, the solid uprise of the mountain flank: and getting down, she looked across the purple and gold of the clearing, downwards at the ring of pine-trees standing so still, so crude and untameable, the motionless desert beyond the bristles of the pine crests, a thousand free below: and beyond the desert, blue mountains, and far, far-off blue mountains in Arizona: “*This is the place,*” she said to herself. (140)

また、そこで大自然の壮大さと美しさ(145)、そして潜勢力を目のあたりにしたルーの心はときめきを感じるのだった。

It was always beauty, *always!* It was always great, and splendid, and, for some reason, natural. It was never grandiose or theatrical. Always, for some reason, perfect. And quite simple, in spite of it all.

So it was, when you watched the vast and living landscape. The landscape lived, and lived as the world of the gods, unsullied and unconcerned. The great circling landscape lived its own life, sumptuous and uncaring. Man did not exist for it. (146)

その大自然の風景はまさに「神々の世界」であった。それ自体のために存在しているのであり、人間の存在などを気にとめることはない。

ここで、「ラス・シーヴァス」という牧場の名前について考察を加えておこう。「雌ヤギ」という意味を持つこの名前についての批評家たちの解釈をブラウンが次のようにまとめている。

Critics seem to see the name as a kind of guarantee that Lou, a non-Christian surprised by a hunger to come into the presence of God, really has found her way to Pan. (25)

このようにルウが「パン神への道を見つけた」というように捉える者が多い中、ブラウンは疑問を呈する。「真なる神を探求する過程で、ルウがヤギの神を見放したことをこの物語は強調しているが」、結末でこのように「ルウ自身がもう一人の雌ヤギにすぎない——確かに並外れて気高い雌ヤギだが——という印象を与えることを、この物語は本当に意図しているのだろうか」、その意味でロレンスは「へまをやらかしたのだろうか」(25)と。この点もまた結末の期待をそぐ要因の一つになっているという事実は否めない。

「雌ヤギ」の意味をもつその牧場の設定が、パン神の里といったものを想起させる効果を醸し出しているのは確かである。もっとも、パン神を巡っては、ロレンスの立ち位置は複雑である。まず、ルウがモアのうちにパン神を見出していた(cf. 64-66)ことを想起すべきだろう。「大いなる山羊のパン」(“Great Goat Pan”)ではなく「大いなるパン神」(“Great God Pan”)そのものを見出していたにもかかわらず、そのモアの神性が幻想と化し、人間と同じ生き物に成り下がり、ルウがモアをテキサスに残して旅立ったということを思い起こすと、彼女が求めたのは、半人半獣のパン、人間的要素を備えたパンでないことはいうまでもないだろう。ブラウンも指摘する通り、彼女が求めたのは、圧倒的なまでに非人間的なものであったはずである。

更にいえば、ロレンスは「ニューメキシコ」において次のように汎神論(pantheism)よりもずっと広大な「宇宙宗教」を提唱している。

It was a vast old religion, greater than anything we know: more starkly and nakedly religious. There is no God, no conception of a god. All is god. But it is not the pantheism we are accustomed to, which expresses itself as “God is everywhere, God is in everything.” [...]

It was a vast and pure religion, without idols or images, even mental ones. It is the oldest religion, a cosmic religion the same for all peoples, not broken up into specific gods or saviours or systems. (146-47)

ここで再度強調したいのは、ロレンスの関心はそのラス・シヴァス牧場やその「直近の物事」(147)にあるのではなく、パンやキリストといった個別の宗教の神や神的存在ではなく、その牧場

を取り巻くもっと大きな存在、宇宙的な大自然、「美しく」「完璧で」「はるか彼方にまで広がる」大自然、地水火風の宇宙的な自然(147)にあるということである。卑近な人間のことなど全く無関心な、しかし同時にそれこそが人間の原点である大自然が目の前に広がっていることを見逃してはならない。その場、その空間こそが自分の求めていた場所であるとルウは実感する。彼女は自分の使命を以下のように感じることになる。

“[...] There’s something else for me, mother. There’s something else even that loves me and wants me. I can’t tell you what it is. It’s a spirit. And it’s here, on this ranch. It’s here, in this landscape. It’s something more real to me than men are, and it soothes me, and it holds me up. I don’t know what it is, definitely. It’s something wild, that will hurt me sometimes and will wear me down sometimes. I know it. But it’s something big, bigger than men, bigger than people, bigger than religion. It’s something to do with wild America. And it’s something to do with me. It’s a mission, if you like. I am imbecile enough for that!—But it’s my mission to keep myself for the spirit that is wild, and has waited so long here: even waited for such as me. Now I’ve come! Now I’m here. Now I am where I want to be: with the spirit that wants me.—And that’s how it is. And neither Rico nor Phoenix nor anybody else really matters to me. They are in the world’s back-yard. And I am here, right deep in America, where there’s a wild spirit wants me, a wild spirit more than men. And it doesn’t want to save me either. It needs me. It craves for me. And to it, my sex is deep and sacred, deeper than I am, with a deep nature aware deep down of my sex. It saves me from cheapness, mother. And even you could never do that for me.” (155)

人間同士の「安っぽい性」にうんざりし、「もっと他のものに自分を没頭させたい」(154)と願っていたルウは、こうしてようやくその「他のもの」を見出すのだった。このように、蛇や龍が象徴する大自然の生命力の謳歌、人間の計り知れない大自然の猛威のダイナミズムを認め、謙虚になっはじめて人間は本来の自己に戻り、再生への一步を踏み出すことができるのである。A・ブリークリー(Bleakley)もここで「彼女の変容が達成された」(125)と主張している。<sup>xi</sup>

### 3. 結末解釈

以上見てきた通り、「自分のようなものをここでこれほど長い間、待ち続けてくれていた地霊、未開地の地霊に身を任す」ことを「自分の使命」と感じる主人公が、セイガーや内田氏の指摘通り、果たして「ニューイングランドの女」のように、この地からそそくさと退散し、彼女と同様の道を辿るだろうか。本節ではルウの未来に希望の光を見出したい。

### i. 隠遁生活の是非

アメリカに渡ってからのルウは、人との関わりを極力避けていく。それはまさに隠遁者への途であった。そうすることで彼女は何を求めたのか。やがては人間の「世界」に戻るとしても、一旦は社会から離れ、隠遁者の生活をするを良しとしていたロレンスを想起する必要がある。1922年1月24日に彼自身がC・カーズウェル宛の書簡の中で次のように述べている。

I think one must for the moment withdraw from the world, away towards the inner realities that *are* real : and return, maybe, to the world later, when one is quiet and sure. I am tired of the world, and want the peace like a river: not this whisky and soda, bad whisky, too, of life so-called. I don't believe in Buddhistic inaction and meditation. But I believe the Buddhistic peace is the point to start from—not our strident fretting and squabbling. (*The Letters IV* 175)

人間関係を再構築するにあたり、最初から人間関係を求めるのではなく、まずは人を避け、隠遁者の生活による、あるいは大自然との対峙による、「自己理解」(“self-realization”)の必要があるというわけである。V・リンク(Link)もロレンスの作品における隠遁のテーマに関心を示し、「一種の隠遁者の生活を通して、人物たちが多かれ少なかれ本質的なことに直面している」という(84)。S・ミケルッチ(Michelucci)も「実存的な自己実現の探求」(89)の必要性を論じている。このように、ロレンスの登場人物たちは不毛な人間関係に疲れると、大自然とのつながりによる回復を求め、その中で自己認識の体験を積もうとする。本来自然界の一要員にすぎない人間は、まずは大自然の中に入って、本来の自己を取り戻す必要があるのだ。人間関係はそのあとの問題なのである。人間が機械から解放され、自由になり、本当の意味での人間関係、男女関係を確立するためにも、必要なのはまずは大自然との触れ合いなのだ。そうすることで人間は自らの存在を知る。何故なら、人間はもともとコスモスとつながっていたのであるから。次のロレンスの言説に耳を傾けてみよう。

There certainly does exist a subtle and complex sympathy, correspondence, between the plasm of the human body, which is identical with the primary human psyche, and the material elements outside. The primary human psyche is a complex plasm, which quivers, sense-conscious, in contact with the circumambient cosmos. (“The Two Principles” 227)

自然の中で共鳴する内なる自然性・生命力を取り戻す必要があるというわけである。機械人間となっている現代人同士がいくら交わっても、そこには直接的な触れ合いはなく、生命の交

流は望むべくも無いのだ。

もともと「一人つきりである」ことを嫌うルウだったが(53)、やがては「我に触れることなかれ。未だ父なる神の元に上っていないのだから」というイエス・キリストの心境に理解を示し、その思いを母親への手紙の中で次のように告白することになる。

“Dearest Mother: I smelt something rash, but I know it’s no use saying: How *could* you? I only wonder, though, that you should think of marriage. You know, dear, I ache in every fibre to be left alone, from all that sort of thing. I feel all bruises, like one who has been assassinated. I do so understand why Jesus said: *Noli me tangere*. Touch me not, I am not yet ascended unto the Father. Everything had hurt him so much, wearied him so beyond endurance, he felt he could not bear one little human touch on his body. I am like that. I can hardly bear even Elena to hand me a dress. As for a man—and marriage—ah no! *Noli me tangere, homine!* I am not yet ascended unto the Father. Oh, leave me alone, leave me alone! That is all my cry to all the world.” (120)

そして彼女は「何か、彼女の<sup>スピリット</sup>魂、まさに肝心要の部分に触れてくれる目には見えない存在が現れるまでは一人でいよう」(138)と心に決めるのだった。“*Noli me tangere.*”(120)つまり「我に触れることなかれ」を実践する必要があるのだ。そして最後には「一人であることを望む」(153)ようになる。そこには彼女の真摯なる探究心が見え隠れする。<sup>xii</sup>

しかしロレンスは、このような隠遁者的な状態を最終的なものとして求めていたわけではない、ということは断っておかなくてはならない。人間はもう一度人間関係を求めるためには、一種の隠遁生活を必要としており、その経験を通して人間の卑小さ、大自然の打ち克ちがたさを経験してこそ、次のステップへ進めるということなのだ。

以上、見てきたことから明らかなように、コスモスとの直接的な関係性を築くこと、それこそがルウの求めたことだったのだ。このように人間は宇宙的な大自然の生命力と直接触れ合う必要があるのである。物語の中でもそれは強調されていた。生命を破壊してしまう機械、触れ合いを妨げる機械、機械で成り立つ科学文明を否定することで、ルウが新たな生命力を求めて牧場へ到達したということを忘れてはならない。何よりも彼女は「ニューイングランドの女」とは異なり、大自然のその脅威を恐れることはないのである。

## ii. エコロジー的開眼——「自然には勝てない」という人間の悟りの必要性

同時にもう一点、「ニューイングランドの女」との重要な相違点についても見ておこう。その女の場合、大自然を「飼い慣ら」そうという意志が強かったことはすでに見てきた。問題なのは、大

自然に対して「飼いならそう」とか、「自然を征服しよう」といった「ニューイングランドの女」の奢った姿勢であった。そもそも大自然を飼いならすことなどできるはずがない。鉄村春生氏も自然を前にした時の人間の敗北をニューイングランドの夫婦に見ており、物語を彼らが「御しがたい自然に立ちむかう苦闘と敗北の歴史」と捉え、「敗北などとは、つまるところ人間界の判断である。彼らは人間の極限の努力で大自然に接近し、そして空しくしりぞけられた」(254)と見る。

ではルウの場合はどうだろうか。エーラートも指摘する通り、ルウには「自分たちの役に立つように山の水を飼いならしたいという願望はない」(126)。人間がどれほど抗おうにも、勝てない存在、決して支配できない存在が頑としてある。それが大自然なのだ。奢りを捨て謙虚になり、大自然の中であって、大自然と調和し、自己を見つめ、孤独のうちに大自然の在り方を吸収し、その一部である生命体としての自分自身を取り戻すこと、それこそがまずすべきことなのだ。ルウには少なくとも奢りは感じ取れない。

それでも、大自然の側の「敵意」がある限り、ルウは「ニューイングランドの女」と同様、そこに受け入れてもらえるはずはなく、大自然の「敵意」に対して恐怖を感じるようになり、結局はそこに調和できないのではないかという議論も可能だろう。ルウが「敵意を持った地霊」と調和を保てたのかどうかという点について、ミケルッチも否定的な見方をしている。

Tired of social conventions and awakened to new life through the vitality of the horse St. Mawr, the protagonist Lou Witt leaves England, her husband, and her familiar existence to go to America. Disappointed by the empty social life in the New Continent, she seeks refuge in the uncontaminated nature of Old America, the heart of the Rocky Mountains. But [...] she is unable to reach harmony with the spirit of place, which is hostile, regulated by incomprehensible laws which have already defeated those who tried before her to form a connection with it [...]. (110)<sup>xiii</sup>

しかし、そもそも大自然が常に人間に優しさを示してくれることを期待すること自体が、人間的な発想なのではないだろうか。人間の思いなどにはお構いなしで大自然はただあるがまま存在する。それがたまたま人間の生存にとって厳しい状況であった場合、人はそれを自分たちに対する「敵意」と感じるだけのことなのである。人ができることは、ただ淡々と大自然の中に在ることだけなのだ。

エーラートは自我を大自然に剥き出しにすることなく、むしろ土地の霊に耳を傾けるルウの「エコロジ的」姿に焦点を当てることで、より積極的に彼女の再生の可能性を探る。

This view of the interaction between man and nature constitutes an ecological perspective. By

listening to the needs of the land as well as her own, she will become an integrated part of the ecosystem. This spirit of place, to which Lou responds so strongly, is akin to what Edith Cobb interprets as “a living ecological relationship between an observer and an environment, a person and a place.”<sup>47</sup> Lou has finally found a perspective of life which does not contradict her primitive instincts, but which stimulates her spontaneous response to nature and includes her in the web of life. (126-27)

エーラートはこのように、ルウはエコシステムの一部になり、「生命の網目の中」に取り込んでくれる「生命の全容」(“a perspective of life”)をとうとう見出したと考えている。そしてルウは適応できると次のようにいう。

Lou, on the other hand, who has learnt to accept her animal qualities, mentally has more in common with the goats and the rats than she has with her predecessors. Thus, Lou’s proud conviction that she at last has found her proper home bodes well for the future. Her reconnection with her animal instincts and her environmental awareness indeed suggest she is fit for survival in this harsh landscape. (127)

大自然に耳を傾け、徐々に「無関心」(161)になっていくルウは、エーラートも論じる通り、まさにワーズワスの「賢明なる受動性」(“wise passiveness”)を想起させるだろう。以上、見てきた通り、ルウは明らかに「ニューイングランドの女」とは異なる方向性を目指しているのである。

### iii. 再生を予期させるその他の象徴群

物語の中にはルウに対するロレンスの期待が散見される。一つには、モアがリコを振り落とした後にルウが見る一種の幻視——ノアの大洪水を想起させる幻視——がある。彼女がノアのように将来生き残り、人類の救い手になるかもしれないという予兆を感じさせてくれる。同じくキリスト教への言及としては、すでに触れた通り、イエス・キリストを理解する存在として描写されていたことから、ルウがやがては復活へと導かれる可能性も盛り込まれているといえるかもしれない。

そして最後に忘れてはならないのは、フィニックス(不死鳥)の存在である。アメリカ大陸に渡り、テキサス、サンタフェを経て、ラス・シーヴァス牧場へと更に移動するルウであるが、お伴に蘇り・復活の象徴ともいべきフィニックスを引き連れているのだ。「王冠」(“The Crown”)の中でロレンスが「あらゆる創造物の中でも唯一無比の種であり、頂点にある至高の存在、完全なる貴族」と呼んだ不死鳥。不死鳥が復活を遂げられるのは、「一時的で相対的なものが、自らを永遠で絶対だと主張する」ような「悪」を避けることを知っているからであるという(383)。不死鳥がロ

レンスのお気に入りの表象であることは、彼の膨大なエッセイ集のタイトルが「不死鳥」と「不死鳥II」であること、『最後詩集』の最後が「不死鳥」という詩で終わっていること、また、彼の墓碑にもその不死鳥の絵が描かれていることなどからも明らかである。

フィニックスを男女関係の相手としては受け入れられないルウの逡巡は見てきた通りであるが、少なくとも彼の象徴する「血」や「本能」「原始性」といったものが、どうしても再生には必要であることを暗示しているといえる。このように見てくると、ロレンスが物語の中で、ジェロニモ・トゥルヒージョ (Geronimo Trujillo) という本名を設定しているにもかかわらず、あえて彼のことをフィニックスと呼ぶのも故なしというわけではないだろう。人間ジェロニモはルウのパートナーとしては受け入れがたくとも、「不死鳥」の表象としての彼の要素は再生のためには必要だということなのだ。ルウの道行きには焰に焼かれて何度も再生するその不死鳥の名を持つ存在がつき従ってくれている。しかも、ルウが無理矢理フィニックスを同伴させたというより、むしろ彼の方が一緒に行きたいと名乗り出ている(132)という点も重要であろう。D・スティフラー (Stiffler) が「ロレンスはルウの探求が成功へと導かれるためのあらゆる要素をその場に入れ込んでいる」(88)と主張するのも牽強付会というわけではないのである。<sup>xiv</sup>

## II. 他の作品の結末解釈との比較——「島を愛した男」を中心に

ここで「セント・モア」をロレンスの他の作品と比較してみることはあながち無駄ではないかもしれない。まず、「セント・モア」の出版から約一年後に書かれている「島を愛した男」に目を向けてみよう。主人公のキャスカートもまた小さな島へと移っていき、人間関係を拒否していく。すでに触れた通り、隠遁者的な生活を求めるためにこのように人間関係を絶ってしまうことに対して、ハリスのように「不毛性」(“the sterility”)(195)を感じ取る批評家は多い。キャスカートについても、確かにその結末の状況は死を予感させる厳しいものであり、多くの批評家は結末に彼の死を読み取り、彼の存在を否定的に捉える批評がほとんどである。ロレンスの作品における隠遁のテーマに関心を示し、そのテーマが「セント・モア」、「太陽」、『チャタレー卿夫人の恋人』といった後期作品に見出せるだけでなく、『恋する女たち』にも見出せることを指摘し、すでに触れた通り、「一種の隠遁者的な生活」が人物たちに「本質的なこと」への直面を促していると、隠遁者的な生活を評価するリンク(84)でさえ、「島を愛した男」のキャスカートに関しては、「精神的な再生はできていない」と厳しく断じていることを忘れてはならない(85)。

しかし、この点について筆者は、キャスカートをむしろ「死んだ男」につながる、再生の可能性を秘めた人物として拙論“An Ecological Interpretation of ‘The Man Who Loved Islands’”の中で論じた。つまり、結末の彼の状況は、あくまで「死の舟」で表わされている再生前の必要な過程であり、「死んだ男」における主人公の蘇りへとつながる希望も秘められているということを、作品

中の蛇や龍の象徴を分析することで論証した。このような読みに従えば、一旦は人との関係を絶ち、孤独を求めて人のいない大自然の中に足を運び、そこで宇宙的な「根本的影響力」(“underlying influences”)(149)を受け、大自然の「神々」を「支配することなどできない」(150)という意識の覚醒へと促されるルウの状況は、キャスカートの状況とほとんど重なるのである。とりわけ第三の島に移動したキャスカートが達した境地は、ルウと同様「自然には勝てない」(“You can't win against the elements.”)(173)というものだった。自然は人間の手で「飼いならし」たり、「支配」したりすることはできない、そのことをまず人間は自覚する必要があるのだ。そのプロセスがあつて初めて、人は自己の内なる自然性を取り戻すことができ、次の再生への第一歩を踏み出すことができるのだ。人間の卑小さを知り、人為的なことを避け、我が身を大自然の中に置き、身を委ね、大自然に耳を傾けることにより、「賢明なる受動性」を実践すること、それこそが第三の島でキャスカートの到達した状況であり、それはルウにも通じるものであった。

リーヴィスが作品を「自然に帰れ」というような類いのものではない(cf. 295)と主張しているが、ロレンスの目が人間同士の小さな小競り合いにではなく大自然へと向けられているのは事実であり、そこに、一旦は自然に帰る必要があるというロレンスのメッセージを受け取る必要がある。以上見てきた通り、「島を愛した男」のキャスカートはどんどん小さな島へ、「セント・モア」のルウは山の奥深くへと、両者の向かった方向は一見全く異なるように見えるものの、また、ほとんど独白さえないキャスカートに比べ、非常に饒舌なルウという違いはあるものの、実は両者の求めるもの——「地霊」あるいは「四大」(Four Elements)との対峙、大自然との直接接触による自然界の「潜勢力」の獲得、そして自己の再確認——は最終的には同じなのだ。

パートナーを物語の中で得られていないため、結末は必ずしも希望が持てるわけではないというセイガーの見解は、確かに結末の解釈にあたって説得力がなくはない。ルウやキャスカートは、結末で理想のパートナーが得られていないという点でも一致しているのだ。しかし両者ともに、大自然の一部としての自己存在の覚醒に至った主人公として、成長と再生へのロレンスの期待を背負わされている人物だといえなくはない。登場人物たちにとって「理想の」異性が現れるのかどうかという問題については、キャスカートが続編「死んだ男」において巫女的な女性を得たように、ルウもその後の作品の登場人物へと引き継がれていると考えることも可能なのである。いわば巫女的な状況に甘んじるルウの決意をすでに我々は見てきたが、それを「死んだ男」のイシスの巫女を予言するものとも考えることも可能なのである。<sup>xv</sup> ウィドマーも次のように両者を同様の存在として論じている。

At the ranch, “Las Chivas” [...], she [Lou] awaits the heroic vision of an uncertain future. As with Lawrence’s last virgin serving the “essential fire,” the Priestess of Isis who becomes the temporary

mate of the Christ in *The Man Who Died*, the scene provides a presacrament preparation for ultimate eros rather than agape, for passionate selfhood rather than moral eternity. (72-73)

さて、「島を愛した男」に限らず、他にも『虹』、「プロシア士官」等々、ロレンスの作品には、ある意味曖昧な終わり方をするものが多い。『虹』の結末には、いわゆる聖書に見られるノアの時代の大洪水後の虹とは別の意味での希望が存在することを、虹蛇の概念を援用しつつ拙論<sup>xvi</sup>の中ですでに論じた。全面的なハッピーエンディングではないが、サッドエンディングというわけでもない。少なくともロレンスの作品は、結末で完結といった印象を与えるものよりも、後に続くといった余韻を残したものが多いのだ。「セント・モア」もまた例外ではない。ルウが母親にいった言葉——「これは終わりというよりは、むしろ始まりなのよ」、「これは何か他のことの始まりなの。過ぎたことの終わりでもあるけれど」(154)——はまさに物語の結末解釈についてもいえることなのである。

また、物語の最後のルウとウィット夫人との会話を取り上げてみよう。

Mrs Witt rose to her feet, and stood looking far, far away, at the turquoise ridge of mountains half sunk under the horizon.

“How much did you say you paid for Las Chivas?” she asked.

“Twelve hundred dollars,” said Lou, surprised.

“Then I call it cheap, considering all there is to it: even the name!” (155)

このようにウィット夫人の皮肉な言葉で終わっているため、リーヴィスも一見「尻切れトンボで一貫しない終わり方」に見えると指摘するが、実際は「きわめて適切」で、「作品の重要な部分」になっている(294)と述べ、最終的にはウィット夫人の否定的な反応にもかかわらず、物語の結末に「積極的なもの、創造的な生活の可能性」を感じ取っている。

That is, the life she [Lou] proposes on the ranch, with its history and its symbolic value, in the ‘wild America’ is the antithesis of that represented by the Bloomsbury world she lived in with Rico. And we still feel that she truly apprehends, in this antithesis, something positive, a possibility of creative life, in spite of the closing sardonic comment. (296)

母娘の会話、そして母親の皮肉な言葉で結末を終える作品といえば、ロレンスの作品では「母と娘」が想起されるだろう。両作品ともに、母の束縛からの娘の脱出と、娘のアイデンティティ確立

の問題を扱っている。<sup>xviii</sup> 「セント・モア」はルウと、ある意味彼女の反面教師としての「鏡」でもあるウィット夫人を対照的に描くことで、両者のコントラストをより鮮明に読者に印象付けることに成功しているが、結末で金銭の問題に依然としてこだわっているウィット夫人の言葉に驚きを隠さないルウを見るにつけ、「古い自我に囚われた存在」ともいえる母親からは彼女はすでに自立していると考えられるだろう。だからこそリーヴィスも「積極的なもの、創造的な生活の可能性」を感じ取ることができたのだろう。

物語の結末解釈に限らず読書をする際に心がけるべきことがある。それは、読者がいかに自己を無にして白紙状態で作品と対峙するかということである。キャスカートの捉え方にしても、人間関係を排除していく方向性を不毛だとする人間観をもっていると、あるいは、破壊的な一種の死の経験を悪しきものとする価値観を持っていると、どうしても彼の結末に否定的なものを見出してしまいがちなのだ。ルウの場合も同様である。重要なのは、読者が自分の価値観や人生観などに囚われることなく、真摯に物語と向き合うことができるかどうかである。ルウの人生を追ってきた読者が彼女の生き様に共感するのか否か、それ次第で結末をどう読むかが決まってくるのであり、また、それを個人の問題として矮小化することなく、普遍的なメッセージへと敷衍できるかどうか問われているのである。

## おわりに

現代人はコスモスを、宇宙の大自然を失ってしまった。それは、『アポカリプス』(*Apocalypse*)の中でロレンスが吐露した現代人への問題提起であった。

When I hear modern people complain of being lonely then I know what has happened. They have lost the cosmos. – It is nothing human and personal that we are short of. What we lack is cosmic life, the sun in us and the moon in us. [...] By *going forth* to worship the sun, worship that is felt in the blood. Tricks and postures only make matters worse. (30)

コスモスとの触れ合いについては、古代人あるいは異教徒がよく知っていたという。彼らと現代のキリスト教徒との大きな相違は、次のようにコスモスとの関係性にあるとロレンスはいう。

Perhaps the greatest difference between us and the pagans lies in our different relation to the cosmos. With us, all is personal. Landscape and the sky, these are to us the delicious background of our personal life, and no more. Even the universe of the scientist is little more than an extension of our personality, to us. To the pagan, landscape and personal background were on the whole indifferent.

But the cosmos was a very real thing. A man *lived* with the cosmos, and knew it greater than himself.  
(27)

すべてが個人的になってしまっている現代人と、コスモスこそが「まさに存在感溢れる真実の存在」であり、「人間よりも偉大である」ことを知っている異教徒の違いである。しかし、今や現代人が異教徒のようにコスモスを必ずしも捉えられるわけではない。だからこそロレンスは『アポカリプス』の最後に「太陽とともにはじめよ」というメッセージを残し、そこに希望を託すことになる。

What we want is to destroy our false, inorganic connections, especially those related to money, and re-establish the living organic connections, with the cosmos, the sun and earth, with mankind and nation and family. Start with the sun, and the rest will slowly, slowly happen. (126)

本当にそれで人類は救われるのかどうか、『アポカリプス』もまた結末が曖昧な作品であるといえる。ロレンスは現代社会における問題を取り上げ、結末で「太陽とともにはじめよ」と訴えるだけなのだ。

ロレンスは確かに楽観的とはいいいきれない作家である。例えばノアの大洪水の事後報告としても、虹を天に架けるまでなのである。その虹が必ずしも楽観視できないものであることは、『虹』の結末が、そして人類の歴史が証明している。しかし、同時にいえることは、彼は逆に一方的に悲観論に陥ってしまうこともないということである。悲観論者というには、ロレンスはあまりにも希望を示唆する大地的想像力<sup>xviii</sup>に満たされているのだ。冬に生命が死に絶えてしまったかに見えても、季節が移ろい、春の到来とともに大地は新たに芽吹くのである。まるで死に絶えたかのような冬枯れの木々も、春になるとまた緑の新芽を出すのだ。そのようにロレンスの想像力は、人類の未来がどれほど悲観的であろうとも、どこかに一縷の望みを託し、何らかの明るい将来を思い描かざるを得ないのである。悲観的であるだけでは終わらない作家、それがロレンスなのである。諦めることのないロレンスのお気に入りの表象の一つが不死鳥であった。そして「セント・モア」の中にも「フィニクス」が登場し、最後までルウを見守っていたことを今一度思い起こそう。

限りなく人類の未来に対して悲観的で不安を抱きながらも、結末ではどこかに希望を託さざるをえない。本作品も例外ではない。確かに不吉な様相も見出せる。しかしそれだけ現実が厳しい状況になっているということの証左となる。そういった中、ロレンスは曖昧な終わり方の中にも、問題提起をしつつも主人公にはどこか期待を託せるようなイメージや象徴を盛り込んでいるのである。ルウは、少なくともイングランドから脱出し機械文明社会や人間を避け、モアのように奴隷状態か

ら抜け出すことで自由・解放を求め、最終的に大自然の大蛇(龍)の懷の中へと飛び込み、自己覚醒の道へと進んでいったのである。意識化を促されたルウは、蛇による生のメッセージの非人間的な具現を、壮大な龍あるいは大蛇のイメージとして大自然の中に見るのであった。

状況の厳しさは確かにある。しかし、状況の厳しさはあっても、大事なのは登場人物がそこから新たに再生を遂げる生命力を持っているかどうかなのだ。作品を読んだ我々読者は何を汲み取るのか。希望を託すのかどうか、それによって結末をどう読むのかが決まるのだ。読者自身が今後どのように生き、将来をどうしたいのか、すべては物語全体を読み終わった読者のその後の姿勢にかかっている。少なくともこうして希望の連鎖が読者を通して続くことをロレンスが期待しているのは確かである。彼はモアやルウを通して、現代のような生命力の枯渇状態から脱却するために、「積極的な悪」、あるいは「創造的」かつ「健全な」破壊力をもって機械文明社会の支配から脱却することの必要性、そして、今一度、大自然に身を任せ、「生命の鼓吹者」のメッセージと対峙し、それに耳を傾ける必要性を訴えている。ロレンスこそが大地の奥深いところから地表にやってきた大蛇よろしく、まさに大自然のメッセージを我々に届けようとするメッセンジャーであるといえるだろう。そのメッセージを現代に蘇らせるかどうかは我々読者にかかっている。

## 注

- i 詳しい批評の流れについては拙論「馬ではなく、蛇が……——『セント・モア』におけるキー・イメージ——」を参照のこと。See also Harris 291 n.4.
- ii P・ポブラウスキー編著の『D・H・ロレンス事典』のように、「相反する2つの余韻」を読み取っているものもある。つまり、ルウがロッキー山脈の自然の中に偉大なるパン神を見出す可能性と、彼女が「更なる幻想、つまり真実の曖昧で愚かな影」を見たに過ぎない可能性(240)である。
- iii ウィドマー(Widmer)が作品における「驚異の念」の大切さについて宗教の問題と絡めて論じているので参照のこと(71-72)。
- iv ロレンスは「階級が深い溝を作り、最も人間的な感情の流れがすっかり止まってしまうのだ」と、触れ合いの欠如の原因を「階級」にも見出していることを指摘しておきたい(“Autobiographical Sketch” 595)。
- v 『友達地獄——「空気を読む」世代のサバイバル』(ちくま新書, 2008)、『キャラ化する/される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』(岩波ブックレット No. 759, 2009)などを参照のこと。
- vi 『ケータイを持ったサル——「人間らしさ」の崩壊』(中公新書 1712)(中央公論新社, 2006)などを参照のこと。
- vii 『羽鱗の蛇』や「太陽」など、この時期に書かれた作品において、女主人公たちに同様の葛藤が見られることを指摘しておこう。
- viii この問題に関しては、次のように全く別の捉え方もできるだろう。ロレンスが1914年6月5日にE・ガーネット宛の手紙の中で、『虹』(『結婚指輪』)以降、人間存在を描くのではなく、「炭素」を描くと宣言した

が<sup>8</sup> (*The Letters II* 182-83)、その「炭素の手紙」以後の彼の作品に、いわゆる全人的な人間の描写を求めることはナンセンスであるという議論である。物語の登場人物たちは、人間であって人間ではなく、むしろ人間を形作っている根源的な生命体としての要素の在り方を象徴しているというわけである。そう考えると、ルウという個人とフィニックスという個人が存在しているということではなく、人間のもつルウ的な要素とフィニックスの象徴するものが、どこかで互いに惹かれあいつつも結局は結びつくことはないということを物語が表わしていると考えられるのである。

- ix ウイドマーも、ロレンスが「原始的なものに対して惹かれると同時に嫌悪感を抱いていたことを我々は注目する必要がある」と論じている (71)。
- x 「地霊」の一部の要素である「悪意・敵意」が本作品において鼠などに喩えられたり (143)、また、他の作品では犬などで表現されたりすることもあるが、大自然全体を表わす「地霊」そのものを表象するものとしては、やはり大蛇や龍のイメージが圧倒的であることを指摘しておきたい。
- xi ブリークリーはルウの「達成」を、「動物的な状態の認識」を通して生きる能力を「回復すること」と捉えている (125-26)。この点については、筆者の捉え方とは異なっていることを指摘しておく。
- xii ルウが孤独でありたいと訴える際の次の言葉から、彼女が求めているのは本当の意味での孤独ではないのではないかという議論も可能だろう。“As far as people go, my heart is quite broken. As far as people go, I don’t want any more. I can’t stand any more. What heart I ever had for it—for life with people—is quite broken. I want to be alone, mother: with you here, and Phoenix perhaps to look after horses and drive a car. But I want to be by myself, really.” (153) しかし、このように、母親とフィニックスの存在を排除しないのは、やはり母親が彼女の鏡の役割を果たし (本稿 II 章参照)、フィニックスが再生の象徴としての機能を果たしている (本稿 I 章 3 節 iii 項参照) からであるとも読めるだろう。つまり、両者ともに、彼女の存在の一部として描かれていると捉えるのである。
- xiii ミケルッチは更に、ルーが「もっと優しい、理解可能な他の場所」に行く可能性さえ示唆している。  
Then, venturing into the Rocky Mountains, she stops short on the threshold of the wilderness, disoriented by a foreign spirit of place which is hostile in its primitiveness. Her stopping suggests that she will turn towards another, more friendly, comprehensible, and human place. (111)
- xiv もっともスティフラーは花とりわけユリに焦点を当て、作品全体を統一するイメージはユリの花であり、そしてそれに目を向けるとルウの成功の望みを見出すことができるという。筆者はその意見に対して議論を戦わせているので、詳細については拙論「馬ではなく、蛇が……——『セント・モア』におけるキー・イメージ」を参照のこと。
- xv 他にも、M・ストーチ (Storch) がルウの「発展形」 (“a developed version” cf. 55) として『羽鱗の蛇』のケイトを捉えていることを補足しておこう。
- xvi 『『虹』の結末の新解釈——虹と蛇の表象を中心に』を参照のこと。
- xvii 「母と娘」に関しては、拙論『『母と娘』 (by D.H.Lawrence) における『娘のアイデンティティ』探求』を参照のこと。
- xviii 拙論『《ロレンスとバシュラール》〈物質的想像力〉を駆使した『プロシア士官』の読み』を参照のこと。

## 引用文献

- Bleakley, Alan. *The Animalizing Imagination: Totemism, Textuality and Ecocriticism*. Basingstoke and London: Macmillan P, 2000.
- Brown, Keith. “Welsh Red Indians: Lawrence and *St Mawr*.” *Rethinking Lawrence*. Ed. Keith Brown. Milton Keynes and Philadelphia: Open UP, 1990.
- Buckley, W.K. “D.H.Lawrence’s Gaze at the Wild West.” *D.H.Lawrence Review. D.H.Lawrence in the Southwest*. 25. 1-3 (1993 & 1994): 35-47.
- Ehler, Anne Odenbring. “*There’s a bad time coming*”: *Ecological Vision in the Fiction of D.H.Lawrence*. Stockholm: Uppsala, 2001.
- Harris, Janice Hubbard. *The Short Fiction of D.H.Lawrence*. New Brunswick, New Jersey: Rutgers UP, 1984.
- Lawrence, D.H. *Apocalypse and the Writings on Revelation*. Ed. Mara Kalnins. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- . “Autobiographical Sketch.” *Phoenix II*. Ed. Warren Roberts & Harry T. Moore, Harmondsworth: Penguin, 1968.
- . “The Crown.” *Phoenix II*.
- . “Do Women Change?” *Phoenix II*.
- . “The Hopi Snake Dance.” *Mornings in Mexico and Other Essays*. Ed. Virginia Hyde. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- . “Hymns in a Man’s Life.” *Phoenix II*.
- . *The Letters of D.H.Lawrence Vol. II 1913-16*. Ed. George J. Zytaruk & James T. Boulton. Cambridge: Cambridge UP, 1982.
- . *The Letters of D.H.Lawrence. Vol. IV 1921-24*. Ed. Warren Roberts, James T. Boulton & Elizabeth Mansfield. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- . *The Letters of D.H.Lawrence Vol. V 1924-27*. Ed. James T. Boulton & Lindeth Vasey. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- . “The Man Who Loved Islands.” *The Woman Who Rode Away and Other Stories*. Ed. Dieter Mehl and Christa Jansohn. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- . “New Mexico.” *Phoenix. The Posthumous Papers of D.H.Lawrence*. Ed. Edward D. McDonald. New York: The Viking P, 1968.
- . “Nottingham and Mining Countryside.” *Phoenix*.
- . “On Human Destiny” *Phoenix II*.
- . “St.Mawr.” *St. Mawr and Other Stories*. Ed. Brian Finney. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- . *Studies in Classic American Literature*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1977.
- . “The Two Principles.” *Phoenix II*.
- Leavis, F.R. *D.H.Lawrence: Novelist*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1976.
- Link, Vactor. “D.H.Lawrence’s ‘The Man Who Loved Islands’ in the Light of Compton Mackenzie’s Memoirs.”

DHLR 15. 1-2 (1982): 77-86.

Michelucci, Stefania. *Space and Place in the Works of D.H.Lawrence*. Trans. Jill Franks. Jefferson, North Carolina, and London: McFarland & Company, Inc., publishers, 2002.

Sagar, Keith. *The Art of D.H.Lawrence*. Cambridge: Cambridge UP, 1975. (first printed in 1966) (Art)

---. "Introduction." *D.H.Lawrence: The Complete Short Novels*. Ed. Sagar & Melissa Partridge. Harmondsworth: Penguin, 1988. ("Introduction")

Stiffler, Dan. "Seeds of Exchange: *St. Mawr* as D.H.Lawrence's American Garden." *D.H.Lawrence Review: D.H.Lawrence in the Southwest*. 25. 1-3 (1993 & 1994): 81-90.

Storch, Margaret. "'But Not the America of the Whites': Lawrence's Pursuit of the True Primitive." *The D.H.Lawrence Review*. 25.1-3 (1993 & 1994): 48-62.

Tabei, Yoshiko. "An Ecological Interpretation of 'The Man Who Loved Islands'." *D.H.Lawrence: Literature, History, Culture*. Eds. Michael Bell, Keith Cushman, Takeo Iida, Hiro Tateishi. Kokusho-Kankokai P, 2005.

Vivas, Eliseo. *D.H.Lawrence: The Failure and the Triumph of Art*. Evanston: Northwestern UP, 1960.

Widmer, Kingsley. *The Art of Perversity: D.H.Lawrence's Shorter Fictions*. Seattle: U of Washington P, 1962.

内田憲男. 『ロレンスの贈り物——新たな<生>の探求』. 英宝社, 2009.

田部井世志子. 「馬ではなく、蛇が……——『セント・モア』におけるキー・イメージ」. 『ロレンスの短編を読む』. D・H・ロレンス研究会編. 松柏社, 2016.

---. 「『虹』の結末の新解釈——虹と蛇の表象を中心に」. 『北九州市立大学文学部紀要』第85号. 2016.

---. 「『母と娘』(by D.H.Lawrence)における『娘のアイデンティティ』探求」. 『言語文化叢書 XV——言語と文化のジェンダー』. 九州大学大学院言語文化研究院, 2005.

---. 「『ロレンスとバシュラール』〈物質的想像力〉を駆使した『プロシア士官』の読み」. 『D.H. ロレンスと新理論』. 国書刊行会, 1999.

鉄村春生. 『想像力とイメージ』. 開文社, 1984.

土井隆義. 『キャラ化する/される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』. 岩波ブックレット No. 759, 2009.

---. 『友達地獄——「空気を読む」世代のサバイバル』. ちくま新書, 2008.

ポプラウスキー, P. 編著. 『D・H・ロレンス事典』. 木村公一他訳. 鷹書房弓プレス, 2002.

正高信男. 『ケータイを持ったサル——「人間らしさ」の崩壊』(中公新書 1712). 中央公論新社, 2006.



JOURNAL  
OF  
THE FACULTY OF HUMANITIES  
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU  
No. 86      September 2016

A Ray of Hope in the Ending of “St. Mawr”:  
Liberation from the Machine Civilization and Returning to Nature  
Yoshiko Tabei ..... 1

The Department of Comparative Culture  
The Faculty of Humanities  
The University of Kitakyushu  
2016